

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

二六六一年九月三十日のお伝え

『何事も自主的・積極的に』

喜びをもってする』

十月十八日から二十二日までの御霊入れ者研修会において前向きな報告が上がっていたのに、二十九日になって「しばらくお休みをさせて頂きたい」と言う方が出てきました。何でこういうふうに変わってしまったのか。この点については既に九月三十日のお伝えの中に答えがありますので、皆様にもお知らせ致します。

この方は「陰徳を積み」と言われて、黙って階段を掃除したり、台所の下の整理として、ダンボールを切り張りしてきちっと整理をして下さったり、事務所でもミスコピーを使ったメモを入れるケースを作って頂いたり、テブラを良く打って下さったりした方です。しかも、この方は、前日「予約帖に名前を入れていなかったけれども、申し訳ありませんが、明日行きますからよろしくお願ひします」と言われたのに、翌日になって突然「先生方や皆様にこれ以上ご迷惑をお掛けすることは・・・」ということまで「しばらく休ませて欲しい」と言ってきたのです。

これは事務局の人は自分で気が付かないけれども、話し方の中に相手を責めてはいないだろうか。もう一つは肝心の要点というか、「こういうわけだから」というところが無く、結論だけを言ってしまう。そうすると相手の方は理解しにくい。事務局の人も人を責めるつもりはないんだけどね、言い方が責めている。事務局の者として良かれと思って言っているんだけど、「こうしてみたら・・・」というのがなくて「駄目じゃないか」という感じのことが多い。

「あれは駄目」「これは駄目」となってしまうと、聞く人は心を閉ざしてしまう。特にこの方とは親友のはずだから、もっと打ち明けて「これはこう思うんだけど、どうかな」と言えるような雰囲気にしてあげないと「あれは駄目じゃないか」「これは駄目じゃないか」となると「自分はもう駄目人間じゃないかな」というふうに思っ、自信をなくしてしまう。

名 刀 鍛 え と し て

いつも言うけれども、大神様は叱りながらも「この人にはどうしてあげたらいいか」ということを考えておられるし、その人に良い面があるからこそお叱りもあるのです。大神様に叱られない人間なんていないのです。大神様には神様さえ叱られるのですから。だから、人の世界でまで責められてしまうと、本当の意味で胸襟を開いてということは出来ないでしょう。もっとザックバランに彼の場合は話を聞いてあげたらいいですね。

むしろ追い詰められてくると四面楚歌になったような気がするものです。「あれも駄目、これも駄目」というふうに受け取ってしまうと、行き場がなくなってしまう。彼の一番楽しみである食

に關してまで言っているからね。

しかし、それは本当に神様にお仕えをするというのであれば、臭い物はやめたほうが良いと思うけれども、やはり一遍に「あれも」「これも」と言うときついのかも知れない。徐々に「この分をいつ頃までに、あれの分をいつ頃までに」というふうにして段階を追ってしたほうがいい。何事も「段々の理」ですから。

それに彼の声は本当に素晴らしく、祝詞なんかは本気になってやる気になれば本当に良いと思う。そういう良い点を伸ばして行けばよい。本人としては辛いと思っているかも知れないが、彼は『名刀の鍛え』を受けているのです。

『名刀の鍛え』というものは他の人以上に鍛えられるのです。私もそれを耐えてきたのです。彼も高天原の高い神様とのご縁を頂くかどうかという鍛えだったら、普通の人以上に厳しくても当然ではないか。そこで「あなたが大神様を求めてきた、その道を降りていいのか。そんな弱いものだったのか」と言いたい。

高天原の高い神様のご縁を頂けるかどうかということになると、やはり厳しいですよ。普通の神様以上に厳しいと思う。だから欠点を一つも許さない。それは高天原はチリ一つあっても駄目ということだから、それくらい鍛えられても当然ではないかということです。しかし、それで挫折してしまえば人生そのものが単なるサラリーマンで終わってしまうのです。

厳しきは 期待の高き

単なる神様であればそう厳しくは言われ
ないけれども、大神様が期待されているの
は高天原の高い神様とのご縁です。大神様
の側近中の側近なのですから。そういう神様をお懸けしようとい

うことになれば厳しくても当然です。「それに耐えられないのか」ということで、『名刀の鍛え』は、より高熱で打ち、より冷たい氷水につけるわけですからそれに耐えれば名刀になるけれども耐えられなければ折れてしまう。名刀が折れるかしかないのです。むしろ彼にはそれくらい期待がかかっているのです。だったらそれに忘れていくだけの心積もりがないのであれば休んでもしょうがないけれども、その期待に忘えられない人は神様のところでの本当の意味での役には立ち切れないですね。「あなたは彼の宗教団体の時でさえ、青年隊長として頑張ってこられたじゃないですか」と。厳しくて当然ですよ、高い神様であれば。

「本来であればもっと早い時期にそうなって、高い神様とご縁を頂いて然るべきではなかったか」というお伝えですから、最初から大神様はそういう目で彼をご覧になられて、御指導頂いていたということですよ。

だから厳しいのだということですよ。それに耐えられないのかな。私の場合はそのようなものではなかったよ。もう一歩間違えたらこの世を終わらなくてはいけないかというくらいやはり追い込まれました。自分自身そうだったし、神様から「お前にはもう用がない」というのであれば、人生そのものももういいという感じでした。ほんの僅かであっても神様のほうから何かさせて頂くことがあればということよ、た私の場合にはもっと必死でした。そんな甘いものではなかった。

そう決心してからは、もう脇目もふらず真直ぐでした。もう迷うことはなかったです。要するに「出来ないのは自分の責任であって、大神様のお力はこんなものではない」と常に思っていた。

自分の器が大神様のご意図に叶うようにならないから、お伝えもこの程度しか出来ないんであって、大神様のお力はこんなものではないと常に思っていた。常に「大神様申し訳ありません」と言っていて、それから段々磨いていって、「少しでも」という思いでやっていって、今はもう送った段階で、「もうよし」ということまで出るようになったのであって、やはり一朝一夕で出来るわけではなく、自分なりに一生懸命努力しているうちにどんどんどんどん深まっていくのです。

一つ一つクリアして行けばなんでもないので、今となってはいくつも課題が重なってくるから負担になるのです。最初は、本当にばかばかしいと思うようなことから始まるのだけれども、そのばかばかしいことが、所謂「ひふみ」^{ひふみ}で言えば、「ひふみの一二三」^{ひふみ}だと思えます。

一とか二とかは本当にばかばかしいと思うんですよ。だけれどそれが五六七となってきた時に段々積み重ねになっていくわけで、それがきちつとなっていなければ、自分は一は出来た。でも二は出来ないけれども三に移っちゃったというふうなことをやっている、結局二のところまでグシャツと潰れてしまうのです。

それは今回の行事で美津子先生がなかなか出来なくて、「うーん」と力んでやっていたけれども、大神様から「そなたは地球上から、所謂大地から天に向かって物事をしようとしているから違うのだ。むしろ高天原から地上に向かって行え」と言われて「フツ」とやったら即座に出来たのです。

やはりその違いというものの、地球からウンウン唸ってやったつ

て高天原に届くわけはないのです。自分が高天原に行つて高天原から全世界というか大宇宙に対してボンとやれば済むわけです。

私が最近パツパツとやっているのも、「何で先生はあんなに出来るのかな」と思っていたけれども、大神様から「ご注意を受けて、自分が高天原に行つて自分が美大神様に成りきつて行えば、いとも簡単だった」という体験を美津子先生は今度されたけれども、そういうものなのです。だけどそうだからと言って、まだその段階にならないのにやってみたって、高天原に行つたとしても極端なことを言うとか闖入者になるかもわからないし、お叱りを受けるかもわからない。逆にそう成りきつてやろうと思つたつて出来るものではないので、やはりそれが一から十までの基礎が出来て、そしてそれが百になり千になり、万のものになった時にそれが出来るわけです。

喜びをもつて する姿勢が大事

だから何でもないので。ただ「朝日を浴びよ」と言われたからするのでなく、**喜びをもつて**、**朝日を浴びよ**と言われたからするのでなく、**朝日を浴びよ**と言われたからするのでなく、一週間でもマスター出来るわけですから、一ヶ月でもマスター出来るわけですから、場合によれば今までやっているんだから、一週間でオーケーが出るかもしれない。そういう「言われたからするのではなくて、自分のほうから何事も喜びをもつてする」と、言葉を言葉で覚えているだけではなくて、何事をするにも喜びをもつてさせて頂くという**姿勢**、それが一番大事なのです。

「朝日を浴びなくてはいけない」というのではなくて、「朝日を浴びさせて頂く喜び」というものを持って、その喜びの中で「六